

市場経済の光と陰

聖書からマーケットをみる

講演会概要

関西学院大学 山本 栄一

イギリスでサッチャーが首相になったのが、1979年。アメリカでレーガンが大統領になったのが、1981年。いずれも「市場の自由化」、「小さな政府」をスローガンに、可能な限りの市場経済化をスタートさせました。それから4半世紀、ソ連、中国を中心とした社会主義は放棄され、日本を含めて世界各国は、軒並み市場経済化への道をひた走りに走っています。

サッチャー・レーガン政権の成立に続く社会主義の崩壊は、「市場経済」の完全勝利のように見えます。わが国も、バブル経済崩壊後の1990年代に「失われた10年」といわれる期間に、市場化への道を歩み始め、小泉政権は具体的な諸施策に道を開き、今に至っています。

この4半世紀の歩みは、それまでの世界経済、引いてはわが国経済とどこが違うのでしょうか。それまでも経済のしくみは、「市場経済」であったはずで。

講演では、このことにテーマを絞って、現在、世界が競って進めている市場経済は万々歳なのか。そうではないことは、高度経済成長下にある中国の経済格差問題は、最もよく指摘されているところですし、わが国でも程度は違っても同様に「格差」問題が指摘されています。これをどう考えれば良いのでしょうか。

経済学は、この問題に正面から取り組んできたものの、最終的には、市場経済がもつ「光と陰」にどのように対処するかは、市場の「光」と「陰」をいかにバランスするかを言う以上のことは、われわれの判断に委ねられるといえます。

キリスト教の聖典『聖書』は、世界と人類の救済を説く宗教の教典ではありますが、古くから社会経済問題にも絡んで、具体的な課題の解明と対応に大きな影響を与えてきました。特に、新約聖書のイエスの言葉と振るまいは、当時の社会経済を背景にしながら、時と空間を超えて、さまざまな視角と人間と社会のあり方に道を示して来ました。

今年、講演者は『問いかける聖書と経済』（関西学院大学出版会）を公刊し、聖書によって「経済と経済学」について、かなり網羅的に考えていることを展開しました。詳細はそれを見ていただけたらして、今回は、その中から、イエスの「たとえ話」を取りあげて、市場経済はなぜ「光と陰」をもっているかについて、聖書が伝えることとお話するつもりです。

キリスト教は、経済を一段下の価値を持ったもので、「清貧」が人間にとっては尊いと言っているのではないかと思われているかも知れません。しかし、聖書は、明らかに経済価値の重要性は認めていますし、それも神の賜物だと述べています。それでは市場経済の光と陰はどうか。これが講演の主題となるものです。